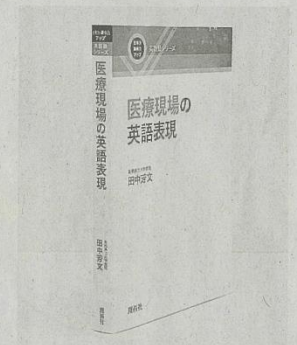
R6年２月 新聞記事（山陰中央新報）

令和6年２月10日（土）付

医療現場の英語表現（田中芳文著）

注目の一冊

医療ノンフィクションの略語詳述



本書は数々の海外医療ノンフィクションの翻訳で知られる島根県立大学の田中芳文教授による書き下ろしです。タイトルは医療者の英語学習書ですが、内容は一般読者にも向けた読み物です。

著者は医療者ではなく、高名な英語研究者です。文中の英語表現の説明は丁寧に出所や論拠が添えられ、内容の確かさを裏付けています。著者が、英語圏の医療現場の描写を正しく伝えるために積み重ねてきた努力が存分に生かされ、分かりやすい説明に加えて関連事項について幅広い考察がなされ、医療者の関心にも十分応えられる内容です。

生きた英語表現が取りあげられ、ノンフィクションやドラマで使われた表現が中心である点が特記すべきだと考えます。実際の医療では、医療安全の観点から安易な略語使用は禁じられますが、頻出しており、日本の日常医療では出合わない隠語や麻薬犯罪がらみの表現も多く、ある意味アメリカの現況の反映です。

しかし「weak and dizzy」（力が入らなくてめまいがする）のように一般的な患者の症状表現が医療者間でどう解釈されているかも詳しいです。カタカナ用語が氾濫する日本の医療現場で知らずに身についた和製英語（ラパアッペ）の本場での使われ方「Lap Appy」（虫垂切除術）などを発見する楽しみもあります。

本書は、臨床の場面で出て来る表現に焦点を当てています。しかし、次々に作られる医療略語や現場の表現は時代と状況により意味も異なります。その中でコロナ禍で生まれた表現「maskne」（マスクを長時間着用することで皮膚にできるニキビ）まで取り入れられているのは驚きです。

長年、北米の臨床現場で働いた私にも、新たな発見があり、教養書として楽しまれるようお勧めしたいです。医療者でなくても気ままにページを開けば、その都度新たな学びがあります。楽しいですよ。

（宮坂勝之・医師、聖路加国際大学名誉教授）

（開拓社・２４２０円）